

## 物語る教会の説教

### ——「物語る教会の神学」への応答として——

小 泉 健

#### はじめに

芳賀力教授は2022年度末をもって東京神学大学を定年退職される。芳賀教授は、教会を「神の大いなる業を世に向かって宣べ伝える物語る教会（エクレシア・ナランス）」<sup>1)</sup>と捉え、さらに神学そのものをも「物語る教会の神学」<sup>2)</sup>として構想した。ここで言う「物語る」とは、ペンテコステの日に聖霊を注がれた弟子たちが「神の偉大な業を語って」（使徒2：11）いたことに始まるあらゆるキリスト者の語りを指しており、たいへん広い意味を持っている。説教することだけを指す言葉ではない。とはいえ、「神の偉大なわざを語る」ことを具体的に考えるなら、説教を除外してしまうことはほとんどありえないことであって、むしろ説教こそもっとも本来的な教会の語りとして考察することになるに違いない。その意味では、芳賀教授の神学は説教へと直結していく神学であると言える。

「神学」84号は芳賀教授への献呈論文集であり、「聖書的語りの担い手と日本社会」との主題を掲げている。ここでは、「物語る教会」が「聖書的語りの担い手」と発音し直されるとともに、聖書的語りが教会だけでなく、もっと広く日本社会そのものに向けられていることが示されている。聖書的語りは教会形成の言葉であるだけでなく、伝道の言葉でもあるということである。「聖書的語りの担い手と日本社会」という言葉は芳賀教授の神学を大きく捉える見取り

図を示していると言ってよい。芳賀教授の神学は日本伝道と日本における教会形成の苦闘の中から、そして、伝道と教会形成に仕える伝道者を養成する労苦の中から生まれた。芳賀教授の神学の著しい特徴の一つは（これは東京神学大学の学問的伝統であると言っても差し支えないと思うが）、個性的、革新的な学問的業績を上げようとするよりも、牧師・伝道者の働きを助け、励ます神学であろうとするところにある。そのことに感謝しつつ、芳賀教授の神学が実践神学にとってどのような意味を持つのかをめぐるささやかな応答を示すことを試みたい。

## 1. (受容) 説教論から見た「聖書の語り」

### (1) 宗教改革者の説教理解

「説教とは何か」という問いは、説教そのものであると言ってもいいほどの重要な問いだが、この問いへの答え方が、今日大きく変わってきてしまっている。その現状を見る前に、わたしたちは宗教改革者の説教理解を振り返って確認することから始めたい。

宗教改革者たちは礼拝を改革し、福音的な礼拝を形作ろうとした。礼拝の改革は、使用する言語、礼拝順序、賛美の献げ方、聖餐礼典の構造、さらには礼拝奉仕者の服装や立ち位置に至るまで多岐に及んだ。また、地域や時代、教派によって実に多様な礼拝の形が生み出されていった。宗教改革の礼拝がそれほどに多様であったにもかかわらず、どのような礼拝においても共通の、しかももっとも重要な改革のポイントは説教の回復であり改革であった。

たとえば、マルティン・ルターは改革運動のかなり早い時期にあたる1523年に「会衆の礼拝式について」と題するパンフレットを出版して礼拝改革の方向を示したが、そこで、当時の礼拝のもっとも大きな乱れは「神の言葉が黙していること」であるとして<sup>3)</sup>、神の言葉の説教の回復を求めた。その際、教会の中にあるのは「朗読と歌唱だけ」だとし、説教の中に「多くの非キリスト教的な寓話が入り込んでいる」と述べていることが注目される<sup>4)</sup>。礼拝の中で聖

書朗読は行われていたし、説教と呼ばれる語りも行われていた。それでもルターは、神の言葉が沈黙しているとみなしたのである。

聖書朗読は、古代以来、教会の礼拝において一貫して行われてきた<sup>5)</sup>。7世紀に由来するローマの朗読聖書日課は、ルター派や聖公会にも受け継がれることとなった。そうであるにもかかわらずルターは、聖書朗読がなされるだけでは、神の言葉が語られているとは認めなかった。現代のローマ・カトリック教会は「聖書が教会で読まれるとき、キリスト自身が語るのである」（「典礼憲章」7）と宣言するが、このような宣言に至る聖書朗読への理解を宗教改革者たちは共有しなかった。「福音の生きた声」が必要だと考えたのである。

説教は古代、中世を通して行われ続けていた。しかし、民衆がラテン語を理解しなくなっていったのに対し、聖書はウルガタ訳が決定版であると宣言され、聖書の翻訳は厳しく制限された。たとえば教皇インノケンティウス3世は、聖書を翻訳し、それに基づいて聖書を解釈した説教をしようとしていたメッツの教会に書簡を送り、そうした試みをやめ、司祭の教導に服従するようにと求めた（DS 770）。中世の説教は地域によって大きな差があるが、ラテン語で行われるいわゆるスコラ的説教は教理についての講話だったし、民衆語で行われる説教は聖書に対して極端な寓論的解釈を施すか、もしくは聖書から離れて聖人物語や寓話を用いるかした道徳的勧めであった。礼拝での聖書朗読と説教とがまったく結びつかないことは珍しくなかった。そのような状況に対して宗教改革者たちは、説教とその日に朗読される聖書の御言葉とが結びつき、説教が御言葉の解き明かしであることを求めたのである。まさにヘルマン・ディームが言うように、「宗教改革者たちは、聖書が説教テキストであるという、その根源的な、また本来的な意味において聖書を再発見したのであり、それによって、宣教の本当のプロセスを再構築したのである」<sup>6)</sup>。

宗教改革者たちの説教理解は、第二スイス信仰告白のプリンガーの定式に集約されていると言える。「神の言葉の説教が神の言葉である」<sup>7)</sup>。この信仰告白がその前段で告白しているのは、「聖書は神の言葉である」ということである。そのことと直接に結びついて「神の言葉の説教は」と言うとき、この信仰告白

は、説教が聖書テキストの解き明かしであることを求めている。さらにこの信仰告白は、「神の言葉の説教が神の言葉である」との見出しに続く本文において、その説教が「教会において、正しく召しを受けた説教者によって告知される」ことと、「聖霊の内的照明」を受けることを求める。説教はこの三つの要件（聖書テキストに基づくこと、神の召命と教会の任職による奉仕者によってなされること、聖霊の内的召命を受けること）を必要とする。そのような説教であれば、そしてそのような説教こそが聞き手にとっての神の言葉だということなのである。

## （２）現代の説教における説教理解

20世紀を代表する神学者であるカール・バルトは、もともとは村の教会の牧師として説教の奉仕のために苦闘し、その苦闘の中から新しい神学を展開していくこととなった。その最初期にあたる1920年代前半のバルトの講演、論文には、「キリスト教宣教の困窮と約束（1922年）」<sup>8)</sup>、「神学の課題としての神の言葉（1922年）」<sup>9)</sup>、「キリスト教説教における人間の言葉と神の言葉（1924年）」<sup>10)</sup>など、説教の課題に直接取り組んだものが少なくない。ここに挙げた最後の講演は、各節の冒頭にまとめの言葉を掲げているが、第1節のまとめの言葉はこうである。

「啓示において語られ、聖書において証しされている御言葉は、教会の奉仕のもとで、今日も自らの声を聞かせようとしている。キリスト教説教はこのことを前提としてなされる」<sup>11)</sup>。

それから本文に入り、バルトはプリンガーの定式を引用して講演を始めている。バルトは明らかにプリンガーの定式を現代において発音し直そうとした。その際、後に神の言葉の三重の形態<sup>12)</sup>や説教の二重の定義<sup>13)</sup>によって示されることになる説教理解が、ここにすでに表れているのを見て取ることができる。説教は人間の側からすれば「教会の奉仕」であり、「教会に命じられた試み」<sup>14)</sup>だが、それを用いて神が御声を聞かせてくださる。主イエス・キリストにおける歴史的啓示と聖書によるキリスト証言がなければ説教はありえないが、説

教こそが「今日」聞かれる神の言葉である。だからプリンガーの定式は、そのニュアンスを強調して言えば「神の言葉の説教こそが、今ここでの神の言葉である」ということであるし、またバルトは神の言葉の三重の形態を語る際に、「宣教された神の言葉」から始めたのであった<sup>15)</sup>。

しかし、現代の説教学はプリンガーの定式から出発しようとはしない。説教における神の言葉を問うことは、説教者に負いきれない重荷を負わせることだというのである。ドイツ語圏の説教学に今日まで強い影響を与えている実践神学者にエルンスト・ランゲがいるが、ランゲはこのように述べている。

「問われるべきなのは、*praedicatio verbi divini*としての説教、教会の根源としての説教、その本質とその約束ではない。問われるべきなのはむしろ、具体的な説教の行為、週ごとの説教の課題とその解決である。*Praedicatio verbi divini*は組織神学的な吟味の対象である。〔……〕そこで成立する説教概念は、そのようなものとして、実践神学、説教学には役に立たない」<sup>16)</sup>。

19世紀に説教学が神学の一分野として成立した時、説教学は、本質的説教学（説教とは何か）、内容的説教学（何を語るか）、形式的説教学（いかに語るか）の三部に分かれていた<sup>17)</sup>。それに対してランゲは、本質的説教学を組織神学の役割であるとして実践神学からは分離してしまい、説教学が問うのは、「いかにして説教をするのか」「説教するとき、何をしているのか」なのだとする<sup>18)</sup>。しかし、説教の本質を問うことを放棄してしまうとき、説教学は「神が」語るという垂直の契機を失うことになってしまう。

ランゲは「具体的な説教の行為」を問うのだと言うが、ではその実態はどのようなものだろうか。アメリカの実践神学者ウィリアム・ウィリモンの観察は、ランゲの主張と驚くほど響き合っている。ウィリモンはこう述べている。

「わが教派的ファミリー（引用者注：ウィリモンは合同メソジスト教会に属している）の中で聞く説教は、その大半が、感情に訴えようとしている。説教は、人間の意識の中にあるものに触れ、何かを目覚めさせる、あるいは、呼び起こす。その際に、聖書の証言を用いるが、それ以上に、説

教者の主観的体験を駆使する。そして、喚起されたものを「信仰」と呼ぶ。この企てには先達がいる。シュライエルマッハー。救いとは、神についての意識が呼び起こされることである、と彼は言った。この意識は人間の心の深みから生まれる。そこで神は少々忘れられていたが、巧みな説教によってふたたび思い出させることができる。説教は、人間の内部にあるスピリチュアルな核心にふれる。スピリチュアルな核心の主な素材は、「感情」である」<sup>19)</sup>。

一人一人の説教者が組織神学的にバルトの神学を受け入れていようと、その他のどのような立場に立っていようと、「説教するとき、何をしているのか」を問うならば、自由主義神学的な説教をしているというのである。

現代の説教は、意識することもないうちに、きわめて人間的になっており、神学的でなくなってしまう。その上、説教学がそのことを問題にすることもない。説教学は説教の本質を問うことを放棄してしまっているからである。ここに、説教の危機がある。説教の本質をめぐる考察を手放してはならない。「説教とは何か」を問うのをやめてしまうと、説教は人間がこしらえるスピーチに過ぎなくなり、説教学はスピーチの作り方と話し方を教える技術論になってしまう。

### (3) 「聖書的語り」としての説教

芳賀力は物語る教会の神学を展開するにあたって、まず啓示を問い、説教の本質を神の啓示の働きの内部に位置づけた。その際、決定的に重要なのは、歴史の上でのイエス・キリストの出来事である。しかし、神の啓示の働きは御子の派遣だけで終わらない。

「啓示はまず、歴史的出来事としての事実 (facta) から始まる。そして、それを証しする語り (dicta) が続く。その語りは文字 (littera) に書きとめられて伝承された。しかし、この啓示の生きた伝統は、再び語り (dicta) へと転換されることの中で、効力ある出来事 (facta) となる」<sup>20)</sup>。

このように主イエスの出来事を伝承していく行為もまた、神の啓示の働きの属

しているとするのである。すなわち、神の啓示の働きには、父による御子の派遣、御子による救済の業、聖霊による教会の成立と今ここでの救済行為の全体が含まれることになる。そして、この大きな啓示の働きの内部に、聖書に基づく生きた語りである説教が位置づけられることになる。説教が新しい啓示の出来事であるわけではない。しかし啓示の出来事から切り離された人間の講話にすぎないのでもない。神ご自身の啓示の働きの中で用いられるのである。

ここで大切なのは、「啓示の伝統」、「歴史的出来事の伝承」という考え方である。「受け」また「伝える」（Iコリント15：3参照）べきなのは、教会が生み出した言葉や行為であるにまさって、イエス・キリストご自身である。もちろん、啓示が伝えられていくことそのものは、神ご自身の啓示の働きに属するが、教会の伝承行為はこの神の啓示の働きに奉仕することになる。熊野義孝は「客観化された伝統は常に主体的生命としての伝承的活動を要求する」とし<sup>21)</sup>、さらに「教会の伝統は、キリストの生命の伝承である」と述べた<sup>22)</sup>。芳賀はこの伝承概念を受け継ぎつつ、啓示の働きの中に位置づけることで発展させたと言える。

## 2. (展開) 説教における「聖書的語り」の実践

### (1) 三重の時間、三重の物語を含んだ語りとしての説教

聖書は再び語られることを待っている。正典文書が再び物語ることに至る。このことは、説教にとってどういう意味を持つことになるだろうか。聖書の背後には主イエスの出来事がある。聖書は主イエスに出来事についての使徒的な証言、使徒的な語りに基づいている。そして、その聖書をテキストとして説教が語られる。すなわち、説教は主イエスの出来事に基づく語り（である聖書）に基づく語りである。そこで、説教を三重の時間を含んだ語り、三重の物語が重なり合った語りだととらえることができる。

説教は三重の時間を含み、三重の物語を語る。

- I イエス・キリストの時、イエス・キリストの物語
- II 聖書の時、使徒的証言の物語（多くの時、多くの物語が重なり合っている）
- III わたしたちの時、わたしたちの物語

(I) 決定的に重要なのは、イエス・キリストにおける歴史的啓示である。

(II) 聖書には聖書固有の時があり、使徒たち自身の物語がある。それゆえ、聖書はすでに（少なくとも）二重の時間、二重の物語を含んでいる。聖書研究における歴史的批評的方法は、この観点からすると、二重になっている時の分離を目指す試みと言える。聖書の言葉が複数の時間を含んでいることを明らかにしたことはこの方法の貢献である。ただし、時を分離し、イエス・キリストの時だけを取り出そうとすることによって、キリストとの出会いに至ることができるわけではない。キリストの出来事は使徒的証言を媒介にしてでなければ知ることができないからである。

(III) 説教は主イエスの歴史的出来事を伝承し、聖書を語る行為である。この行為は、今という時の中で、新しい出来事として行われる。それゆえ、説教はつねに（少なくとも）三重の時間、三重の物語を含むことになる。

このように捉えた場合の説教の課題は、三重の物語を保持し続けることにある。一つの物語だけを語ろうとする試みは成功しない。

(I) 福音はイエス・キリストの物語であり、説教の目的は主イエスを紹介することにあるので、説教において純粹にイエス・キリストの物語だけをしようとすることがあり得る。しかし、主イエスの出来事は啓示そのものであり、わたしたちが啓示を所有することはできないのであって、いきなり主イエスの物語だけをすることはできない。そのような語りは聖書的語りにはならず、語り手の信仰、思想、イデオロギーの押し付けにしかならない。それを聞いても、聞き手は主イエスの出来事を受け取ることはできないのである。

(II) 説教が聖書だけを語ることはしばしば見られる。聖書講義をするのである。背景を説明し、字句の理解を深め、その箇所を解釈を行う。聖書テキストについての学習を行うことになる。そのような学習は、啓示を伝承するため

の準備や助けにはなる。しかし、そのような学習そのものは、霊ではなくて文字に仕える行為であり、過去を過去として語ることにとどまってしまう。今ここの啓示の出来事への奉仕にはならないのである。

(Ⅲ) 聖書講義はどれだけ正しいことを語ったとしても、聞き手が生きることとは結びつかない。目の前にいる聞き手に語りかけ、聞き手が生きること助けたいと望む説教者は、「わたしたちの話」をするかもしれない。上に挙げたランゲはこう述べている。

「説教するとは、わたしは聞き手と共に彼の人生について語る、ということである。わたしは彼と共に、彼の経験と意見について、彼の希望と失望、彼の成功と断念、彼の使命と運命について語る。わたしは彼と共に、彼の世界とそこでの彼の責任について、彼の存在の危機とチャンスについて語る。彼が、すなわち聞き手がわたしの主題である。それ以外のものではない」<sup>23)</sup>。

あるいは、帰納的説教は聞き手の具体的な経験、具体的な出来事を語ることから始め、この世に仕え、現在を語る。そのように「わたしたちの話」をすることで、なるほど聞き手の共感を呼んだり、聞き手の感情を動かしたりすることはできる。しかし、そのような語りは、語り手から聞き手へとまったく人間的に行われる人間の言葉にとどまるのであって、啓示の出来事そのものからは離れてしまう。宗教、道徳、文化を届けることはできても、啓示の伝承に奉仕することにはならないのである。

説教の課題は、三重の物語を保持し続けることにある。以上見てきたように、一つの物語だけを語るというわけにはいかない。聖書的語り(Ⅱ)を今ここにいるわたしたち(Ⅲ)が聞いて、聖書とわたしたちの間に対話が生じる。聖書の物語の中にわたしたちが入っていき、聖書の物語がわたしたちの物語になる。そのことを經由して、聖書が証しているキリストの物語(Ⅰ)がわたしたち自身の物語になるのである。

## (2) 三重の物語を見る説教分析

一つ一つの具体的な説教において、三重の物語がどのように語られ、相互にどのように関係しているか。この観点から説教分析を行うことができる。説教の中の三重の時間を区別し、それらの相互のかかわりを示すことによって、今ここにいる会衆がどのようにしてキリストの物語の中に入れられたかを示すのである。

説教分析にはさまざまな方法があるが<sup>24)</sup>、その中でも、ルドルフ・ボーレンを中心としたハイデルベルク・グループによる「説教分析のためのハイデルベルク・テーゼ」<sup>25)</sup>が日本での説教分析に大きな影響を与えてきた。「ハイデルベルク・テーゼ」は、説教が四つの言語の融合であると考えた。この考えと対照させると、ハイデルベルク・テーゼにおける「神の御名」を語るのがキリストの物語（Ⅰ）であり、「聖書」による言葉が聖書の物語（Ⅱ）であり、「説教者」と「教会および世界」が共に形作るのがわたしたちの物語（Ⅲ）だということになる。説教の言葉において「説教者（語り手）」の言葉と「教会および世界（聞き手）」とを区別することを重視しないことが、ここでの説教の捉え方の一つの特徴と言えるかもしれない。

さまざまな説教分析論が提案され、実践されてきた中で、もっとも早い段階から注目され、おそらくもっとも多くの分析において手がかりとされてきたのは、「説教の中で説教者が自己をどのように表出しているか」、また「説教の中で説教者の自己と聞き手の自己とがどのように交流しているか」という問いであった。たとえば、深層心理学をもちいた分析がある。説教の出来事をコミュニケーションのプロセスの一つとみなし、説教はいつでも人格の表現であり、人格的な交流であると考えた。そこで生じるコミュニケーションを、自己理解と他者理解の組み合わせに応じて「距離を作る」「抱擁する」「強制的」「制約なし」という四つのタイプに分け、それぞれにおいて、自己や神や聞き手がどのようにイメージされ、存在や信仰がどのように理解され、関係を持つことに対してどのような衝動や不安があるかを見る<sup>26)</sup>。あるいは、臨床牧教教育の知見を用いた分析もある。説教（あるいは説教者）が聞き手に対してどのような

影響を与えたのかを聞き手の反応から知り、それを土台にして説教を捉える。説教のタイプとして「不安に駆られる説教者」「感謝にあふれた説教者」「要求する説教者」「従順な説教者」「重荷を負いすぎた説教者」「意気消沈した説教者」「楽天的な説教者」などがあるというのである<sup>27)</sup>。さらにはまた、交流分析を用いた説教分析も行われている<sup>28)</sup>。

しかし、このような説教分析論の土台となっている説教理解は、説教を「福音のコミュニケーション」<sup>29)</sup>と見るE. ランゲの説教論であり、それを受けて、説教を修辞学の内部に位置づけたゲルト・オットーの説教論<sup>30)</sup>であるのは明らかである。説教を啓示の出来事から切り離し、語り手と聞き手の間の福音のコミュニケーションにすぎないと考えるのであれば、説教分析における関心は、説教においてどのようなコミュニケーションが行われたか、語り手と聞き手にどのような関係が生まれているかということになる。それに対して、説教を啓示の働きの中に位置づけるのであれば、説教分析は啓示の出来事と今ここにいるわたしたち（語り手と聞き手）がどのような関係を持つに至ったかを問わないわけにはいかない。そのための一つの方法として、説教の中にある三重の物語を区別し、それらの相互の関係を問うことが考えられるわけである。筆者がこの方法を用いて行った説教分析の数はまだわずかだが、少なくともそれらの説教の分析においては、この方法を有効に用いることができることを確認している。

## おわりに

2023年1月10日、東京神学大学の第3回「教職者のためのオンライン・シンポジウム」が行われた。主題は「聖書的語りの共同体」。芳賀力教授が「聖書的語りの担い手と日本社会」と題して主題講演を行った。『神学』84号に掲載されている芳賀教授の同名の論文に基づく講演であった。主題講演に続き、東京神学大学の各部門の教員6名が発題を行った。筆者もその一人として発題を担当した。

筆者は芳賀教授の主題講演を「聖書的語り」「聖書的語りの担い手」「日本社会」の三点に分解して応答を試みた。そのうちの「1.『聖書的語り』」の部分で語ったことと、発題では触れなかったが、発題の背景になっていることとをまとめたのが本論文である。紙幅の関係で発題の後半を取り上げることはできなかった。ここに概要のみ記しておきたい。

発題の「2.『聖書的語りの担い手』としての教会共同体」においては、芳賀教授の主張を（教会論としてよりも）教会形成論として受け止めた。日本の教会において、教会の形成を「どこ」で考えるかが重要である。東京神学大学は教会形成を重んじてきたが、では、教会を形成するとは、具体的には何をすることなのか、どうなったら教会が形成されたと言えるのか、という問いである。その際、古カトリック教会の成立の要件とされる、正典制定、信条の確立、職制の確立を考えることは重要な土台となる。宗教改革は、福音の純粋な説教と聖礼典の福音的な執行を教会のしるしとした。そのことを踏まえつつ、宗教改革者マルティン・ルターが教会を「御言葉の被造物」<sup>31)</sup>と呼んだことを思い起こしたい。芳賀教授が、キリスト者はみな聖書的語り音担い手とされており、また教会は聖書的語りの共同体として、神の啓示の働きに用いられる、と語る言葉は、「御言葉の被造物」という言葉と響き合う。教会を人が造り、人が支配するのではなく、御言葉が造り、御言葉が支配するのだと考えるとき、その具体化は聖書的語りによって行われることになる。聖書的語りによる教会形成を構想することができるのである。

聖書的語りによる教会形成を実践神学的に展開しようとする場合、まず必要となるのは、聖書の御言葉を教会形成的に黙想することである。聖書を読むことも、説教も、あまりにも個人主義的に行われている。個人の救い、個人の慰めを聞き取ることしかできていないのである。そのままでは、聖書的な語り が教会形成に至ることもない。聖書そのものが神の民に向かって語りかけており、神の民の中で読まれることを求め、神の民を建て上げようとしているのであるから、聖書を読むことは、読み手を共同体形成に至らせるはずである。発題においては、教会形成的黙想の一例として、ヨハネによる福音書3章で現臨

の主の語りかけを聞き取り、そのことが生み出す結果として4章で共同体が形成されていることを示そうとした。

発題の「3. 『日本社会』への聖書的語り」においては、日本社会のことを取り上げた芳賀教授の主張を（弁証論としてよりも）伝道論として受け止めた。東京神学大学は教会形成と共に伝道を重んじてきた。その際、各論の一つとして「伝道論」を持つだけでなく、神学そのものを伝道学として構想してきたと言える<sup>32)</sup>。芳賀教授の主張を伝道論として受け取る時、ここでも、伝道は方策によってではなく、福音そのものの力によって前進する、という考え方が土台をなしている。福音の把握において、キリストの贖罪による罪の赦しを中心に持ちつつ、救済を生る全体にかかわるものとする。そして、この世のあり方に代わる「善き生」の構想を福音として指し示す。そのような福音の提示が伝道力を持つのである

芳賀教授の主張は、説教の課題に直結する。説教そのものにおいて福音の把握があいまいになり、また、福音と律法、（聖書テキストの）解釈と（生活への）適用が分裂してしまっているからである。福音を語ることに徹しようとするあまりに、大きな（神の）物語しか語らないと、説教の言葉は聞き手の心に届かず、聞き手の頭の上を通り越していくことになる。かといって、聞き手に語りかけようとするあまりに、小さな（わたしたちの）物語しか語らないと、キリストがおられなくても成り立つ話になってしまい、キリスト説教にならない。これが、説教者がいつも直面している課題である。この課題を乗り越える説教が必要である。伝統的な言葉を用いれば、聖化に仕える説教である。礼拝順序の中で説教に続くのは、賛美、信仰告白、献金である。順序としてそうであるだけでなく、中身において、説教が賛美（すなわち礼拝すること）、信仰告白（すなわち証しし伝道すること）、献金（すなわち献身すること）を引き起こすのでなければならない。このことのためにも、まず必要となるのは、聖書の御言葉を聖化に向けて黙想することである。御言葉はわたしたちを悔い改めさせ、造り変えようとしている。義認と共に聖化を与える。福音そのものに倫理的力がある。そのようなものとして御言葉に聞き、説教者自身が変えら

れること、そして御言葉の力を聞き手に届けること。それも、説教の課題である。

(こいずみ・けん)

## 注

- 1) 芳賀力『神学の小径 I ——啓示への問い』キリスト新聞社、2008年、18頁。
- 2) たとえば、芳賀力『物語る教会の神学』教文館、1997年、参照。
- 3) マルティン・ルター「会衆の礼拝式について」『ルター著作集 第一集 第五巻』聖文舎、1967年、275頁。
- 4) 前掲書、275頁。
- 5) たとえば、150年頃にかかれたと考えられているユスティノスの『第一弁明』に「太陽の日と呼ぶ曜日には、町ごと村ごとの住民すべてが一つ所に集い、使徒たちの回想録か預言者の書が時間のゆるす限り朗読されます」(67:3)と述べられている。4世紀に由来すると考えられている『使徒憲章』になると、複数の箇所から朗読することになっている。すなわち「律法と、預言者たちと、わたしたちの書簡と、言行録と、福音書の朗読の後、按手された者が会衆に挨拶することから礼拝が始まるのである。5世紀には礼拝での朗読に用いる聖書箇所のリストが登場している。
- 6) Hermann Diem, *Theologie als kirchliche Wissenschaft*. Bd. III: *Die Kirche und ihre Praxis*. München 1963, S. 179. また、芳賀力、前掲注(1)書、223～225頁参照。
- 7) 渡辺信夫訳「第二スイス信仰告白」関川泰寛他編『改革教会信仰告白集』教文館、2014年、312頁。
- 8) Karl Barth, *Not und Verheißung der christlichen Verkündigung*. in: ders., *Vorträge und kleinere Arbeiten 1922-1925*. hrg. von Holger Finze, Zürich 1990, S. 65-97.
- 9) Karl Barth, *Das Wort Gottes als Aufgabe der Theologie*. in: op.cit., S. 144-175.
- 10) Karl Barth, *Menschenwort und Gotteswort in der christlichen Predigt*. in: op.cit., S. 426-457.
- 11) Op. cit., S. 430.
- 12) Vgl. Karl Barth, *Die kirchliche Dogmatik: I/1*. Zürich 1942, § 4.
- 13) Vgl. Karl Barth, *Homiletik: Wesen und Vorbereitung der Predigt*. Zürich 1985, S.

30-32.

- 14) Ebd., S. 30.
- 15) ディートリヒ・リッチェルはバルトが神の言葉の三重の形態を語る際の順序に注目した。ハインリヒ・フォーゲル、オットー・ヴェーバーなど多くの人が神の言葉の三重の形態を語りつつも、順序を逆にした。権威の順序としてはそれが正しい。しかし、わたしたちが神の生きた言葉を聞く順序は説教に始まるのであり、バルトはそれを明確にするためにあえて「宣教された神の言葉」から始めた。リッチェルは、バルトの順序の方が「はるかに適切である」とする。  
Cf. Dietrich Ritschl, *A Theology of Proclamation*. Richmond 1963<sup>2</sup>, pp. 25-46.
- 16) Ernst Lange, *Zur Theorie und Praxis der Predigtarbeit*. in: ders., *Predigen als Beruf*. München 1982, S. 19.
- 17) 今日でもこの形式で書かれた説教の教科書がある。たとえば以下の書物を参照。  
Hans Martin Müller, *Homiletik*. Berlin 1996.
- 18) Vgl. A.a.O., S. 20.
- 19) ウィリアム・ウィリモン『翼をもつ言葉 説教をめぐるバルトとの対話』新教出版社、2015年、214頁。
- 20) 芳賀力『神学の小径Ⅰ——啓示への問い』235、236頁。
- 21) 熊野義孝「キリスト教概論」『熊野義孝全集 第六巻』新教出版社、1978年、141頁。
- 22) 前掲書、160頁。
- 23) Ernst Lange, *Zur Aufgabe christlicher Rede*. in: ders., op.cit., S. 58.
- 24) Vgl. Stefanie Wöhrle, *Predigtanalyse: Methodische Ansätze – homiletische Prämissen – didaktische Konsequenzen*. Münster 2006.
- 25) 「説教分析のためのハイデルベルク・テーゼ」加藤常昭『説教批判・説教分析』教文館、2008年、70～79頁。
- 26) Vgl. Wilfried Engemann, *Einführung in die Homiletik*. Tübingen 2011, S. 61-74.  
この本はドイツ語圏を代表する説教の教科書だが、説教をコミュニケーションのプロセスと捉えることが本書の基本的な説教理解になっている。
- 27) Vgl. Hans-Christoph Piper, *Predigtanalysen: Kommunikation und Kommunikationsstörungen in der Predigt*. Göttingen 1976.
- 28) Vgl. Wöhrle, a.a.O., S. 49-75.
- 29) Lange, *Zur Theorie und Praxis der Predigtarbeit*, S. 13f.

- 30) G. オットーが説教を修辞学の内部に位置づけた記念碑的な著作が『語りとしての説教』である。

**Gert Otto, Predigt als Rede: Über die Wechselwirkungen von Homiletik und Rhetorik. Stuttgart 1976.**

オットーが自らの説教論を集大成した著作の題は『修辞学的説教』という。

**Gert Otto, Rhetorische Predigtlehre: Ein Grundriss. Mainz 1999.**

- 31) 「御言葉の被造物 *creatura verbi*」というのは、ルター思想を表現するために後から造られた言い方であって、ルター自身は「教会は、信仰のみことばにより、信仰をとおして生み出され、同じことばによって養われ、支えられるからである。〔……〕神の御言葉は圧倒的に、教会の上であり、教会はこの御言葉の中で造られたものとして〔……〕」と言っている。

ルター「教会のバビロン虜囚について (1520年)」『ルター著作集 第一集 第三巻』聖文舎、1969年、323頁。

- 32) その顕著な例が、近藤勝彦『伝道の神学』(教文館、2002年)であり、『キリスト教教義学上、下』(教文館、2021、2022年)である。